



//// 第64回 高等学校卒業式 2021年2月28日(日)大講堂 ////

高校卒業式の祈り司教メッセージ

カトリック京都司教 パウロ大塚喜直

マルコによる福音書4章35～41節

その日の夕方になって、イエスは、「向こう岸に渡ろう」と弟子たちに言われた。そこで、弟子たちは群衆を残し、イエスを舟に乗せたまま漕ぎ出した。ほかの舟も一緒であった。激しい突風が起り、舟は波をかぶって、水浸しになるほどであった。しかし、イエスは艫の方で枕をして眠っておられた。弟子たちはイエスを起こして、「先生、わたしたちがおぼれてもかまわないのですか」と言った。イエスは起き上がって、風を叱り、湖に、「黙れ。静まれ」と言われた。すると、風はやみ、すっかり凪になった。イエスは言われた。「なぜ怖がるのか。まだ信じないのか。」弟子たちは非常に恐れて、「いったい、この方はどなたなのだろう。風や湖さえも従うではないか」と互いに言った。

ヴィアトール学園洛星高等学校を卒業される皆さん、ご卒業おめでとうございます。世界は今、新型コロナウイルス感染症によるパンデミックの終息を祈りながら、感染防止と社会生活の両立を模索する日々が続いています。皆さんの学校生活も一変してしまいました。目標を持ち、計画を立てて営んでいた生活のリズムが激変し、出来なくなったことも多かったと思います。そして、高校を卒業し、次の進路に向かう今年も、まだまだ通常とは異なる、制限のある社会生活が続くでしょう。

でも、わたしは卒業生の皆さんに、敢えてお願いしたいことがあります。それは、ただネガティブな気分でコロナ禍をやり過ごすのではなく、この時代(危機)を積極的に生きる道を模索してほしい、ということです。コロナ禍の中で、これから人生のキャリアを築いていこうとする18歳の皆さんに、人生の意味を問うという、重たいことを求めることは酷かもしれませんが、でも、わたしたちは誰でも、人生のどのステージでも、その時、その時代を生きなければなりません。

今日の聖書のことばは、昨年3月教皇フランシスコがパンデミックにおびえるわたしたちへのメッセージの中で取り上げられた、嵐を鎮める時に弟子たちを叱責されたイエスのことばです。「なぜ怖がるのか。まだ信じないのか」(マルコ4・40)。大きな嵐に遭い、弟子たちはどれほど怖かったでしょうか。旧約聖書では、海は怪物のイメージがあり、海が荒れるとはいのちの破壊を意味し、死のイメージがありました。人間は恐怖を抱くと、自分で自分を救おうと考えますが、そこから、利己主義が生まれ、すべての悪を招き、結局、自分自身の死を招くこととなります。

弟子たちは、眠ったまま、何もしてくれないイエスの態度に激怒します。そこで、イエスは

「なぜ怖がるのか。まだ信じないのか」と、ご自分が一緒にいることに意義を見出せないでいる弟子たちを叱責されます。恐れを締め出すため、神を信頼する心を持たなければ、恐れと不安に翻弄され、最後はいのちを失うことになる、教えられます。

人生には、運命ではかたづけられない不条理な出来事に遭遇する可能性が多々あります。その時、人は、恐れと不安に打ち勝ち、諦めずに希望を見出すことではじめて、不幸な出来事を意味あることとして受けとめ、意欲的に生きることができます。明日を信じることで、今日を生き抜くのです。

教皇フランシスコは言われます。コロナ感染によって、わたしたちは人類が全員、同じ船に乗り合わせているということに気づきました。だれもが弱く、社会は混乱しますが、しかし同時に、一人ひとりが大切でかけがえのない存在であり、皆が一つになるよう招かれ、互いの慰めを必要としていることにも、気づいています。わたしたちは、他者の苦しみを自分のこととして苦しむことのできる力を持っています。確かに、毎日のニュースを見ていると、休業や自粛の中で助け合う人たちが、わたしたちの周りにたくさんいます。自分や、自国だけの安全や安心にこだわるエゴイズムを排し、すべての人と協力することが必要だと痛感します。

どうか皆さん、コロナ時代に居合わせたからこそ、すべてのいのちを守るため、いろいろな状況にある人のことを理解し、大切に思い、寄り添い、励まし、労り、ともに生きる喜びを分かち合う人になってください。コロナ禍をたくましく生きて、人生の糧にしてください。

キリストはいつもそばにいて、助けて下さいます。これからの人生において、神の恵みと力づけが豊かにありますように、私から祝福をおくります。

## 学校長式辞

洛星高等学校校長 阿南 孝也

64期生の皆さん、卒業おめでとうございます。皆さんは、洛星での6年間を通して、神からいただいた能力を磨き伸ばしてきました。今思い返してみましても、皆さんが様々なことに積極的に取り組み、仲間と共に活躍してきた姿が次々と目に浮かんできます。洛星から新しい世界へ巣立つ皆さんに「人類共通の家である地球とすべての被造物を慈しむ人であってください」という言葉を贈ります。

地球は、人を含むすべての被造物が共に暮らすかけがえのない場所です。教皇フランシスコは、地球を「人類共通の家」と呼び、人は神からこの家を守る大切な役割を授かっていると述べておられます。無限の宇宙空間の中で、大気や水、地表から成る薄皮のような生命圏だけが、人が生きることのできる場所です。人は地球との物質的な循環の中で、他の被造物と共存してきました。ところが私たち人類は、目先の利益と経済成長の名のもとに、かけがえのない地球を汚染させ、その結果、命そのものを危険にさらしてしまいました。はびこる無関心や使い捨て、対立の文化から脱却し、思いやりの文化を根づかせて、持続可能な社会の確立が急務です。卒業生の皆さん、人の尊厳を守り、世代から世代へと引き継がれるべ

き共有財産の保全を図り、命あるすべてのものを慈しむ人であってください。

卒業式の祈りの中で、大塚司教様は、「コロナ感染によって、私たちは、人類が全員、同じ船に乗り合わせていることに気づきました」と話されました。ワクチン供給の知らせは大きな希望です。しかし、同じ船に乗り合わせている世界中の人に供給されるのでなければ、世界からリスクが消え去ることにはならないのです。心を一つに寄せ合って共通の危機に立ち向かい、乗り越えていくことができますように。皆さんは、コロナが収束したとき、どのような社会になればよいと思いますか。元に戻したい部分と、戻さないほうが良い部分を見極めて、より良い社会を築くチャンスとして生かすことのできる人であってください。

さて、人口減少が進行する社会にあって、AIが判断し、ロボットの手で仕事が行なわれる時代を迎えようとしています。そのような新時代に大切なもの、それは「コミュニケーション力」です。コミュニケーションの語源はラテン語の「コムニス “communis”」、これは「分かち合う、共有する」という意味の言葉です。自分を理解させようとする前に、まず相手を理解しよう、相手の痛みや悩みを共有しようとする姿勢が求められます。洛星を巣立つ皆さん、ぜひ、人の痛みに気づくことのできる、強く優しい心を大切にしてください。

大学入試では、難題は捨てて、できる問題を選択することが合格への近道かもしれません。しかし現実の社会では、答えのない問題にチャレンジする力や、答えがいくつもある中から最適なものを選び取る力が求められます。今皆さんは、さらに高度の学問の府での学びに夢を膨らませていることでしょう。洛星を巣立つ皆さん、学びへの強い意思を持ち、心躍るテーマに出会い、幅広い教養と深い専門性を身につけ、「真理を探究する人」として成長してくれることを願っています。

人生は常に順風満帆というわけにはいきません。成功だけの人生などありえません。失敗を恐れず、夢を持って挑戦し続けてください。きっと神が応援してくださいます。よき友人は人生の宝です。ここに64期生の大勢の仲間がいることを忘れないでください。母校洛星も、私たち教職員も、後輩たちも、みんな、あなた方を応援しています。

卒業式は別れの式です。しかし同時に、卒業生の皆さんを、洛星から世界中に派遣する日であると考えています。洛星の卒業生は文字通り世界中で働いています。同じここ洛星でキリストの教えを学んだ仲間です。あなた方を待っている人がたくさんいます。卒業生の皆さん、共に暮らす家である地球と地球に暮らすすべての被造物を慈しむ人となって、必要とされている場で活躍してください。

最後に、卒業生の皆さんへ、これからのあなた方一人ひとりの人生の上に、神が、恵みと祝福を豊かにお与えくださいますようお願いして、お祝いの言葉といたします。卒業、おめでとう。